

「日本文明と近代西洋—「鎖国」再考」

川勝平太著

現在、右肩上がりの経済成長が失速するとともに、産業の空洞化が進み、自信と失望感が広がっている。近世初めにおいて、なぜ日本が「アジアにおける最初の工業国家」になったかという問題を巡り、木綿という世界商品に焦点をあてた早稲田大学教授の川勝理論としての研究がある。

著者の専門は経済史であるが、自らを社会科学者としており、本書では、社会科学の経済学と人文科学の歴史学を軸として、経済史的に現在の経済発展（産業革命、工業化、テイクオフ）等について述べている。

第1部は、旧アジア文明圏の物産（木綿、砂糖、絹、茶）がもたらした東西の生活革命とその対応が生んだ、近代西洋と日本の工業化についてである。イギリスの産業革命は自立的であったがゆえ最初の工業国家になり、日本は先進欧米諸国の技術を摂取し、イギリスのほぼ100年遅れで工業化に成功している。日本が先進西欧との技術差を克服した条件は鎖国時代に準備されたとして、日米、日欧の経済・文化摩擦が生ずる中で関心を集める、西洋と西洋の発展とまったく相違する日本文明の本質に迫っている。

第2部では、日本はヨーロッパ文明の外皮に触れ、日本人の価値観が一変している。日本の工業化への志を支え、社会的な行動を起こさせる内面的な原動力となったのは西洋からの唯物史観の受入れである。農業社会を経ているが産業革命を経ている社会を「農業社会」、産業革命を経た社会を「工業社会」と区分けしている。「工業社会」へは、人間と自然を結ぶ「もの」づくりが、自然学としての生

物と人間の棲み分けを破壊しながら発展した。経済発展をしつつ、自然との共存共栄が可能かという課題を投げかけながら、その論理は、次のように展開されている。

第1部 日本と西洋の併行的「脱亜」アジア文明圏からの自立

1. 鎖国と近代世界システムの連関

「鎖国」は、日本の手工業壊滅を防いだが
欧米文明VS日本文明 生活様式の大変革

2. 木綿の西方伝搬とイギリス産業革命 インド洋世界の三角貿易

インド木綿を凌駕したイギリス木綿

3. 木綿の東方伝搬と日本産業革命 日本VSイギリス

日本産業革命—アジア間競争の勝利

4. 「脱亜」の二つの形

第2部「経済と文化」の構想

1. 唯物史観と近代日本

封建制から資本主義への移行

2. 今西「自然学」への注目

生物の棲み分け 人類は棲み分けているか

3. 文化・物産複合論

4. 日本文明の形

これまでの歴史書には見当たらない経済史論に驚きを禁じ得なかったが、21世紀の工業教育を推進する立場から、次の点を本書を熟読し、心にとどめておきたい。

①イギリスと同時期、江戸時代の私塾、寺子屋の総合的な学習の推進が、日本の近代化の支えになった。

②自然の征服を目指す西洋の科学以上に、自然と共存する自然学（今西）を大切にして工業教育を進めるべきである。

③人間と物との関係を見直し、自由を目指す生活水準の向上にむけ、ものづくり教育を推進しなければならない。

(NHKブックス 266頁 1020円)(國廣宗猷)